

SHISEIDOGALLERY

ギャラリートーク

「コラボレーションについて」

ナビゲーター／今村源、中村政人、田中信行、須田悦弘、金沢健一

日時／2005年1月29日(土) 14:00～16:00 会場／ワード資生堂

司会（樋口） それでは、本日のギャラリートークを始めたいと思います。司会進行を務めます資生堂ギャラリーの樋口です。よろしくをお願いします。

皆さんもちょっと戸惑われたのではないかと思うのですが、通常こういうトークといいますと、あちら側に演台があって、そこに出演者が座って、こちらを向いてしゃべるといった形が普通なのですが、今回は、メンバー全員で座談会のような形でやろうと思っておりますので、こういうふうに皆さんに取り囲まれつつやるようにしてみました。



「life/art」のメンバーを紹介いたします。ぼくの右隣から、中村政人さんです。それから、今回の中心人物である今村源さん。隣が田中信行さんです。それから、須田悦弘さん、金沢健一さん。この5名でやっているわけですが、皆さん、もう今までごらんになったことはありますか。今回初めて見ましたという方はいらっしゃいますか。—でも、半分くらいの方は過去にも見ていらっしゃるわけですね。

初めての方に簡単に説明しておきますと、この展示会は2001年に始まりまして、5年の間にこの5人の同じ顔ぶれで5回の展示会をやっていくというシリーズ企画展なんですね。展示会の趣旨は、簡単にいいますと、美術と工芸の領域を問い直すというか、美術と工芸の狭間にあるような表現というものを、作家とともに考えていくということです。

この展示会の非常に特徴的な点は、毎回誰か1人が中心人物になって、その人が展示会のテーマを設定するんですね。そのテーマに基づいて、ほかの4人も制作していくということをやっています。今回は今村さんがイニシアチブをとられて、「私」というテーマでやっているのですが、具体的には今村さんとほかの4人の方がそれぞれチームを組んでコラボレーションをするということをやったのです。そこで、今回、全員の方に集まっていただいて、

それぞれのコラボレーションがどういうものであったかという話をさせていただこうと思っています。

まず、そもそも「私」というテーマを今村さんが考えられて、こういうことをそこで聞いたかったのかということをお話しいただけますか。

今村 「私」というテーマで今回やらせていただいたんですが、もともと自分の中でも「私」ということに興味がある、すごく抽象的なんですけども、自分の場所といいますか、自分の立ち位置といいますか、そういうものに興味を持っていました。例えばおもしろい場所がどこにあるかということ、ちょっと前なら多分おもしろい場所というのは、旅行に行って地方へ出ていくとか、日本を出て外国へ行くとか、外国であっても、より秘境のところにおもしろさがあるとか、もっといけば地球の外にもっとおもしろいところがあるみたいな、そういう発想で外へ外へという感覚があったんです。でも最近では、何かその辺から返ってきて、地球って結構宇宙的に見ても変なとこやなと思ったり、その中に日本というのがあって、日本も相当変な国でおもしろいとこやなという感じもありまして、関西人なので関西も変なとこやなという感覚もありますし、自分が人間という生き物で、これも動物の中でも相当変な生き物やなと思いますので、方向が、おもしろいところの方向が自分へ自分へと返ってきて、自分というものの立っている場所みたいなものを見ていくことが、結構おもしろいことじゃないかなと思ってまして……。

その辺から自分の周辺とか、自分の立ち位置みたいなことを少し考えていくということをやっている中で、日本という場所で美術をやっている自分というのがどういう立ち位置に立っているのか、明治期に美術という観念を外から受け取って、何か知らんうちに美術というものが自分に根づいてきているという解釈があって、それで私の表現みたいなことを強くあらわしていくことが美術家には求められているんじゃないかと、これも別に習ったわけではないんですけど、やっていく中で感じるようになって。

例えば極端な話になりますけれども、美術館で、あの作家は下の絨毯まで変えるぐらいの仕事をしたというようなことがすごいと。例えば建物の内側の色を全部変えたとか。そういう自分の表現みたいなものをどれだけ出せるかという競い合いというのを、何か自分に課されているような感覚もあるんです。

それとは全然違うんですが、例えば関西だと「そんなんだめやで。あかんで」というふうな言い方をするんですけども、「あかんで」と言ったときに、その「あかん」というのは、私が主語で、私がそのことをだめだと言ったという感覚も入っているんですけども、日本的な考え方でいくと、例えばその場所が学校で、学生に「あかん」と言ったら、何か学校の雰囲気とかその場の持っている感じ

がそこを「あかん」と言わせているような感じがしたりします。よく日本人の特徴として主語を抜くと言いますが、何かその場とかその雰囲気も含めて、何かを表現している言語体系というか、生活習慣というか、そういうものを日本人は持っていると思うことがありましてね。それはすごく自分の中で実感を持っていて、だから、その感覚と今言った美術家としての振る舞いがなじまないような感じがして、その辺で「私」という立ち位置の不思議な複雑さといえますか、そういうものをすごく自覚するわけです。その辺の問題意識を、この「life/art」という機会で問いかけてみたいという思いがあったんですね。

普通のグループ展なんかでも、「何でこのメンバーが集まったん？」という問いかけが必ずあるんですね。グループ展に入ると、「あいつとおれと一緒に？」とか、極端に言うと一緒にしてほしいみたいなことは結構あって。このメンバーだって、一番最初に集まったときはそれぞれが、「何で一緒にやねん」と選んだ方に問いただしたりもしていましたし、やっぱりその辺も、自分が持っているスタイルとかアイデンティティみたいなものが、グループで一緒にされることによって崩れていくというか、一緒にされたくないみたいな感覚があったりするんじゃないかと思うんです。

だけど4年もすると、だんだんその辺も丸くなっていくというか、気心が知れてくるというか、何か違いもあるのだけれども、一緒の部分もあるなという理解が自分の中に生まれてきて、「私」ということをキーワードにして、メンバーの中に何か共通性が見出せるのではないかと考えたんですね。

例えば、横に座っている田中さんは漆という素材を使っておられるんですけど、漆というフィールドは自分1人でやるのではなくて、まず漆をとってくる人……、漆をとる人が東北におられて、木の樹液を血を流すような形でとってくる。そういう貴重さであるとか、自分1人で何かをやっているという感覚がすごく薄いフィールドやなと思ったんです。何かとつながっているというか、全体性があるというか、そういうフィールドでやっているのだから、全面的に「私が」というふうな作品にはならないんじゃないかなと思ったりしました。

須田さんであれば、すごく精密な木彫りをされるんですけども、いわゆる彫刻的な自己表現をそこに込めて、何か個性を出していくという感覚ではなくて、もう少しクールに、そんなこと関係ないと。それが違う場所に置かれることによって放ってくるものであるとか、何か自己表現的なところから逃れるような意識が感じられるので、そういう面で先ほど言ったことにつながってくるのではないかというような気がしています。

金沢さんの場合でも、鉄という素材を使われるのですけども、例えば溶接をしたときに熱で色が変わってくるのも、熱と鉄と、たまたま自分がそれをひっつけるという行為で何かが変わっていくというふうな割とゆだねているようなところがあって、自分が100%何か表現をしてやるのではないように感じます。音の作品にしても、自分で一から音をつくるのではなく、鉄の中から音を引き出してやっているような感覚を持ってられるし、その音自体も、たまたま人とコラボレーションをされたときに、そういう仕事もしてみようかということから始まったというあたりも、自分が先にあって何かするということは違うんじゃないかなと思ったり……。

中村さんも、2回目に「nIALL Project」※という発想で「家」の作品展をしたのですが、そのときも中村さんが何かをするのではなくて、別にだれが中心になるわけでもなく、みんなが頭になってよりいい方向に導いていこうという発想でやられていたので、それも「私」ということが前面に出てくるのではなくて、もう少し

周りとの関係で仕事ができているという感覚があって。

そういう感じで、それぞれが「私」ということで結構共通点みたいなものがあるんじゃないかなと考へまして、それなら、そういう形でテーマにしていったら、案外おもしろい、共通性ということでもおもしろい展覧会になるんじゃないかなという気がしました。

それから、コラボレーションという形にしていったんですけども、自分もそうなのですが、せっかくこの場やから、何か自分を変えていって、テーマに合わせていこうという気はあるんですけど、やっぱり自分が抱えているスタイルとかやり方みたいなものがなかなか崩せないですね。こういう場所が大舞台になればなるほど、ここで何か変なことをして失敗したらなとか、なかなか思い切って何かをやるということが少なかったんですね、自分の場合でも。

ですから、あえてコラボレーションすることによって、割と気楽になるという感覚がありまして、極端に言えば失敗しても自分の責任やないと(笑)。一緒にやったんやからそうだったんやけどというふうな、ある種、冒険ができるような感覚があって。今までもコラボレーションの経験はあるんですけども、やはり、ふだん「これはちょっとな」というふうなことも平気でできたりしますので、どうなるかはわからないのですけども、ある種、失敗したり混沌としたものになったとしてもいいじゃないかと。見る人にもふだんの仕事とこの仕事の違いとか、いろいろな形で見てもらったら、よりおもしろいものになるんじゃないかなと思ったわけです。

司会 ありがとうございます。まだ展覧会をごらんになっていない方だと話がわからないと思うので、カタログを3部ほど用意しましたので回覧します。

4通りのコラボレーションが行われたわけですが、そもそもこれを始めたときに、最低2回はミーティングをしようという取り決めをしていたんですね。ざっと概要を説明しますと、まず、田中さんと今村さんのコラボレーションは漆を中心に行われたのですけども、おふたりがミーティングされていく中で、「とどめる」というキーワードが生まれてきました。どういうことかといいますと、要は漆というのは、それが木であれ何であれ、物をくるむわけですけども、くるまれることで、もともとの物が非常に頑丈になるわけですね。漆は飾るための塗料でもあるのだけれども、物を頑丈にするということもありまして、それは単純に物理的に頑丈にするということだけではなく、そのときに、それを塗った人、あるいはそれを持つようとしている人の気持ちといいますか、想いというものの中に一緒にこめていくようなことがあるのではないかということが、おふたりの話の中で出てきたんですね。それが「とどめる」という言葉につながっていったのですが、そのキーワードをもとに、おにぎりといいますか、お米の作品を今村さんは今までも何度かつくられているのですが、そのお米の作品に漆を塗ってみようというプロジェクトが生まれました。これが今村さんと田中さんのコラボレーションです。

次の須田さんとは、仕事を発注し合うというプロジェクトだったんですね。お互いがお互いに、こんなものをつくってくれと頼みまして、そのでき上がったものを今度は自分が受け取って、自分の作品の中に取り込んでいくというプロジェクトが行われました。

「nIALL Project」=ニアルプロジェクト。中村の造語で、不確定要素「n」はI(主体)とALL(総関網)により構成される従来の世界像に干渉し、現実の社会環境に潜む問題の発掘からその解消に至るまでの一連のシナリオを有機的に生成する、と定義されている。簡単に言うと、誰かが主導権を握ったり強制したりしないフラットな関係でプロジェクトを遂行させること。

具体的に言いますと、須田さんが今村さんに机を用意してほしいという注文をされて、今村さんの方は須田さんに羊歯の葉っぱを彫ってほしいという注文をされました。それが、会場にありますけれども、お互いの作品の中に取り込まれて二通りの作品ができました。

金沢さんとは、最初パフォーマンスを一緒にやろうかと……、金沢さんは「音のかげら」という作品と「振動態」という作品を使ったパフォーマンスをずっと続けていらっしゃるのですけれども、そのパフォーマンスをふたりで一緒にできないかというところから始めて、パフォーマンスを映像作品としてつくり上げようという形に変わっていったんですね。鉄板を敷いて、その鉄板がバネで浮いていて、それをスーパーボールでこするとすごい重低音の振動音も出るのですけれども、その振動で上の砂がいろいろな模様を描くという作品、その「振動態」を使った映像作品ができたわけです。

それから最後に、中村さんと今村さんは最初、プレゼント交換をするというプロジェクトで、お互いがお互いへあげたもの、もらったものから何かイメージを膨らませて、また贈り返す。それを何度か往復して行って、最終的に相手からもらった贈り物からインスパイアされるような形で、それぞれに作品をつくり上げるというプロジェクトをやったわけですね。

それが4通りの作品として会場にあるわけですが、実際にやられた感想というか、困った点というか、具体的にこんなところがおもしろかった、やってよかったみたいなことがあれば、もうランダムに伺いたいのですけれど。



須田 今回の話の前に、まずこの展覧会というのが、ものすごく普通ではあり得ない形でやってきているということがありまして、大体展覧会というのは、1回出したら、もうそれで終わり。資生堂ギャラリーもそうですし、ほかの美術館でもそうなんですけど、グループショーという形であれ、個展であれ、2度目をそこでやるというのはめったにない話なのですが、この「life/art」というものが今回4回目ですけど、普通では余りない経験を4年間やってきているんですね。あと1年あるのですけれど、普通グループショーをやるに当たっても、大体キュレーターと話をするぐらいで、ほかのアーティストと話すのはオープニングのときの飲み会とか、それぐらいでしかないのですが、この5人はものすごい勢いで、ずっと4年間話を続けている感じがあるんですね。

今回は今村さんがテーマを出したのですが、第1回目はそういう形じゃなかったんですね。1人が個展をやって、そのほかの4人がグループショーという形で、1年1人で、持ち回りで5年間で1人ずつというような形でやりましょうという話だったんですけど、最初の打ち合わせのときから、もう既に、「いや、それはどうなんだ?」

みたいな話になりまして、結局、何かテーマを出していこうかという話に徐々になっていった感じなんです。

それで、今回のコラボレーションなんですけど、ぼくの場合は、美術というものが自己表現であるのは間違いないのですけれども、自己表現というだけではなくて、発注とか受注という形で美術とされているものが生まれた歴史があると思うんです。そういうことがあって、コラボレーションしましょうといったときに、お互いにお互いの作品も大分見ているので、じゃあお互いに何か発注し合おうかという感じで、割にすんなりと話がまとまった気がするのですけれど、そうですね（笑）。

今村 ぼくはもう、須田さんのものが1つ欲しいという気持ちがあって。自分のつくりたいものが、あの技術をもって、木彫で精密なものをつくれたら、何か自分の技術が1つ上がったような感じで、それがそのまま自分の作品の中に取り込まれると、すごくすてきなことだなというふうな感覚があったので、厚かましいけど、自分の思いどおりのものをつくってくれたら、これはおもしろいやろなと思ったのでね。ほんまに拍子抜けするぐらい「ああ、いいですよ」という感じやったので、ちょっとびっくりしたんです。

須田 今村さんと樋口さんがうちへ来て、うちの作業場を見たりして、ぼくも今村さんのアトリエに夏に行きまして、結構すごいところですね、京都ですよ。

今村 ええ、京都のはずれですけどね。

須田 山の中で……。

今村 山の中の川の横ですけど。

須田 でも、さっきも言ったようにこの展覧会自体がかなりレアなんですけど、普通、知り合いのアトリエに行くことはあっても、グループショーでたまたま一緒になった人のアトリエまで行くという行為自体が余りあり得ないですよ。そうやって2回は打ち合わせをしたんですけど、結果として、割に今回の作品の中でも、わかりやすいと言うと語弊があるかもしれないですけど、コラボレーションしているふうに見えやすい作品になったんじゃないかなという気はしますね。

今村 実物がなかなか来なかったんですよ。11月ぐらいでしたよね。

須田 ええ、もうすごくぎりぎりでした。

今村 だから、発注はしたんですけど、余り細かくうるさく言うのはあかんやろなと思って。羊歯という大まかなものと、何かこんな感じとか言っただけで、あとは何が来るかわからなかった。それはすごくドキドキで、もう自分の作品は先につくらなあかんかったから、来たものを見てから自分のがつくれるんやったらまだよかったんですけど、なかなか来なかったの（笑）。もういいわと思って、出たとこ勝負やと思って、それはすごくスリリングなことでしたけど。

須田 すみません。すごくいつも遅いので（笑）、言われないと、なかなかやらないという性格なんです……。

今回の羊歯は、今村さんのアトリエに行ったときに、何にしましょうか、じゃあアトリエの周りに生えているこれにしましょうと決まったんですね。夏からえらい時間がたって（笑）、今村さんは気を使ってくれるのか、余り何も言ってこないでそのままになっちゃったんですけど、すみませんでした。

司会 初めて羊歯を彫って、やりにくかったですか。

須田 すごく難しかったですね。彫ったことがなくて、今まで自分が好きでやりたいものしかやっていなかったの。でも、多分自分から進んではやらなかったろうし、ものすごくいい経験にはなりましたね。



金沢 ぼくの中には、常に自分の新しい可能性を見たいという気持ちがあるんですね。ぼくも鉄という素材をかなり使っていますけれども、自分というものと鉄というものを等しい価値のものとして見ていて、その中で何か自分のものが出てくればいいと思っているんです。鉄と出会ったことによって自分の中にあった、あるいは自分では気がつかなかった何か新しい可能性というのかな、そういうものを期待するんですね。

今回、作品の題名に「共振する風景」とつけていますが、この共振というのは、あるものが振動して、それと同じ周波数を持っている他のものも振動するという現象ですね。例えば今村さんの作品なり、全体の存在というか、そういうバイブレーションがぼくを振動させてくれるというか、共振したときに自分の知っている金沢じゃなくて、自分の気がついていない、どこか変なところが共振したらいいなという気がありました。そういうものをぼくは今村さんに期待していました。

具体的に作品のことをちょっと話すと、振動態という、鉄板の振動を取り出す作品なのですが、それはどちらかというところ、自分の作品というよりも科学の実験を大きくしたようなものなんですよ、正直言って。ただ、それだけじゃない自負みたいなものがあって、ここまで鉄板を振動させるやつはないだろうと……。それは何かというところ、鉄板を振動させるには、鉄板とうまく交流できなきゃだめなんですね。自分の意思だけで、振動しろ、振動しろと、ひたすらこすってもだめなんです。向こうの振動を感じ取りながら、それをどんどん増幅させてあげるような気持ちにならないと、鉄板は絶対に振動しないんですね。

多分ぼくが1人で映像をつくったとしたら、その振動の現象のみを凝視していくような作品になったと思います。ところが、今村さんの作品は何かつかみどころがないというところ、何でこの物とこの物が出会ってしまうのだろうというミスマッチというところ、浮遊感というところ、そういうものが多分あって、それがぼくの作品の中に入ってきたときに、この振動の作品がどう変わっていくのかなという期待がありましたね。今村さんが入ってきたことによって、単なる振動の現象を見せるものじゃなくて、例えばこちらと向こうとか、あるいは、こちらの振動しているとても非日常なことと、向こうに車が通っている日常的な風景、そういう非日常と日常とのかかわりだとか、そういうものを新しくぼくの中につけ加えてくれたような気がしています。

あと、もう1つ感じたのは、やはりコラボレーションというのはそれなりに時間をかけなきゃ無理だという気がしましたね。今村さんが京都にいて僕が埼玉にいるというのは、時間的にも、実際の距離としても非常に遠い。その分、やはり意思の疎通がとりにくくなる。これは当たり前のことなんですけど、今、コンピューターなり

ITとか、そういうことが随分言われていますけれど、やっぱり人と人が出会って、そこで話して、何かを語り合わなければ、ものというものは出てこないという感じがものすごくしましたね。

今村 そうですね。今おっしゃられたことはまさに同感で、金沢さんとは、自分が一番やっていなかったこととか、こんなことはやらんやろなということを試してみたいというのがあって、パフォーマンスを金沢さんはもうずっとやられているのですが、私自身はやったことがなかったので、そういう初めての体験をしてみるとか、とにかく違うことをやってみようというのが根本にあって、その辺がある意味でうまくやれたなという実感はありました。

それと、カタログの中で北澤さんが、いわゆるコラボレーションというのは失敗するというところをある意味ではよしとするというところ、それが成功であるみたいな、そういうふうな論旨で文章を書かれているんですけど、私もこれを立ち上げるときに、どうなるかわからんし、失敗するかもしれないけれども、やってみよう。それが変な不協和音になっても、結果としてのその辺の違いなり、不協和音なりが何かの形で出たらいいやろなというところ、最初は思っていたんですね。金沢さんとやり始めた時、私が「失敗してもいいじゃないですか」と言ったら、金沢さんは「いや、やっぱりやる以上は絶対成功せなあかんや」と言われて、実際、私も出てきた結果にいいかげんではいられない、やり出すと何かをあるところまで持っていくという意識が強く働くので、振り返ってみると、やはり最後にグッと詰めて、知らん分野の中でもあるレベルに達するものまでやる追い込みというものを、すごく実感させられましたね。そういう振れをすごく感じた映像やったですね。

金沢 ぼくはちょっと映像もやってたけど、それは単なるパフォーマンスの記録というもので、純粋に映像作品として成立するものというのは、お互いにまだやったことがなかったですよ。それで、とりあえずやってみようという感じでした。例えばここにあるボールペンをこう見ているときと、カメラの目を通して、そして、あそこの壁に映写されたときというのは、全く違うものなんですよ。だから、絵コンテも何も描くこともなく、まずは撮って、見てみようというところから始まった。そして実際に1回撮って、資生堂ギャラリーで試写をしたら、意外とおもしろかったんですね。これはいけるんじゃないかという気持ちになった。

先ほど今村さんが言われたように、失敗してもいいというけれど、失敗がそれなりにインパクトを持ってこない、単なる失敗で終わってしまうと、やはりそれはプロとしてどうしようもないぞと思うんですよ（笑）。

今村 舞台がこう大きければ大きいほどね。

司会 田中さん、いかがですか。



田中 「私」というテーマで今村さんが話をされたときに、ぼくも比較的すんなり受け入れられると思った。それはなぜかという、さっきも今村さんが言っていましたけれども、ぼくの場合、どうしても常に自己の表現と素材という関係の中で揺れ動きながら制作してきたわけですね。やっぱり自分を表したいという欲求はあるわけで、ところが、それと同時に漆を見つめていると、漆ってきれいだなと思っちゃう。その漆を生かすということと、自分を主張するということの狭間に揺れ動くわけですよ。だから、完全に他者を生かしてあげるという視点に自分を立たせれば、立ち位置という言葉が言われたけれど、悩まないのだけれども、同時にやはり自分の内面からわき上がるような世界がある。その両方が一致して成立すれば、ぼくはハッピーなわけですね。ところがなかなかそこに至るには時間がかかる。だから、私ということは自分の問題としてもずっとあったわけです。そういう意味ですんなり受け入れられた。

ただ、問題は、今村さんを見ていて、ぼくと全く反対の感性を持っている方だなと。もう本当に、今は美術的な要素というか、表現手段が、例えばモノからコトへとか、ローテクからハイテクであるとか、どんどんどん時代が、ある意味でぼくが追い求めている世界と対極になっているわけです。そういう状況の中でもぼくはあくまで、自分が尊いと思うものはモノであると、自分が感じる実体感であると、ちょっと思い込みぐらいに思っているところがあるんです。それを大事にしないと制作ができないものですから。そういう自分に対して今村さんて、さっき金沢さんも言ったように、非常につかみどころのないものを感覚的に持っていらっしゃる。だから魅力を感じるし、お人柄もそうですけれども。今村さんとぼくが、前提はわかるんだけど一体何をやったらいいんだろうと、正直困りました。

それで、話していくうちに、今村さんがある程度歩み寄ってくれたのか、漆で何かやりましようとなったので、ふだん1人でつくることが多いので、今村さんと何か作品をつくとちょっとおもしろいかなと思った。ぼくも余りこういう経験がないものですから、いい経験になるな、どういものが生まれるんだろうと思って、一緒に何かつくってみたいと。それで話したのですけれども、一緒に輪島にいたり、産地へ行って、漆のことを一応知ってもらったりして、漆って本当にあれだけの手間をかけてだんだん物が強くなっていく、ということは大事なものになっていく。そういう意味で、漆って大事なものをとどめるといような意味もありますよねと、そこまでは一致したんです。

だけど、そのときに、今村さんがたしか箱みたいなものをつくって、ぼくが内側を塗ったものを、今村さんがスパーンと真っ二つに切りたと言われたんですよ。

今村 そうでした。棺おけをつくるという話から始まって、それを漆で……。実際に棺おけは漆塗りになっているというのもよくあるんですけど。たまたま輪島に行ったときに器がありまして、どんな工程で塗っているのかということを見せるために、カットモデルでその断面を見せているようなサンプルがあるんですね。こんだけの工程が入っていると。それを見たときに、せっかくこんだけのことをやったのを切ったら台無しやなというふうな感覚で見ていたので、それを私は、せつせとやったものを台無しにしてやったらどうやるのかという(笑)、ちょっと思いがあって……。

田中 そこが、ぼくは受け入れられなかったんです。ぼくが箱を塗るということは、何かそこに大事に入れるものを思って塗りますよね。それを真っ二つにして断面を見せることは、ぼくにとってはやっぱり受け入れがたかったんですよ、そのとき。

でも今は、今村さんとやるということは、それぐらいをも受け入れてやるぐらいでないと……。とちょっと思っているんですけど。

これは反省になっちゃいますけれども、やっぱりコラボレーションとしてはもっと意外なものが、より可能性があるのかなと。ただ、断面を見せるというだけでは、それこそぼくにとっては美術的なお遊びでしかなかったんですね。美術という言葉のお遊びでしかない。やっぱり納得できなかったんです。それで、嫌だと言ったんです、今村さんに(笑)。それで、また振り出しに戻ったんです。

そうしたら、今度はお米を持ち出してきたんです。お米も見る人によってはお遊びにも見えるかもしれないけれども、発想としてはぼくは驚いたわけですね。これは、工芸家とか漆家はだれも考えないよな、お米に漆を塗るということは。だけれども、お米というのはずっと民族的に、お祭りでも何でも、いまだに豊穡を願ったときに儀式で使ったり、それは大事なものだから、それを漆で、とどめる。それはぼくとしても納得できたわけです。まず意味として。

今村 私の中では、やっぱり切るといことも、切ってあることによってこれがこれだけの苦勞をもってやっているというのが見えたので、冒とくしているような行為なんだけど、それを通して逆に大事なものであるという物が浮かび上がってくるものになったらおもしろいかなと思っていたので、その2つの関係というのは裏返しというか、つながってはいるのですが。許しがたいというのはよくわかりますし、多分ほんまに工芸家に見せたら、何をやるんやというふうに、まず田中さんが叱られるんじゃないかと思いますね(笑)。

田中 また次に今村さんとやると、もっとおもしろいことができるかもしれないな。どうしても、今回もやっぱり見せるというところにいっちゃうんですね。物としてきちっと見せるという。やっぱりそこから離れないとだめかなと思いましたがね(笑)。なかなか離れられないんですけれど。

今村 実は一番最初に、全然つくりたくないでやりましようというプランも投げたんですよ。名作探訪といいますが、よく田中さんは、あの人の作品はいいなとか、やはり工芸の世界では技術的にも手の届かないぐらいすごい仕事をしている人というのはいっぱいいるらしいので、むしろ自分がつくるといことを完全に放棄して、「もうまいりました」という作品を見に行つてそれを借りてくるという、見ることに徹したプランはどうでしょうかと投げかけてみたのですが、もう全然だめでした(笑)。即座に否定されました。

田中 そうそう。それがぼくにとって何がおもしろいんだろうと思って……。今回は結局ぼくは、おむすびだけでは満足しきれなくなっちゃって、多少こじつけになっているのですけれども、やっぱり自分のつくりたいものをつくったわけですね。コラボレーションとして考えたときに、やはりもう1つ、もっとインパクトのあるコラボレーションであれば、より……。また機会があれば、ぜひやってみたいなと思いますけれどもね。いろいろ、とにかく経験させていただきました。



中村 どうでしょうね、今村さんの話にあった「あいつと俺と一緒にされたくない」のあいつは多分ぼくなんじゃないかな（笑）。

最初の今村さんの立ち位置という話は、ぼくも非常に興味があって、美術だけの問題じゃないような感じで聞いていたんですけども。それは、やはり近代の中における「私」という意味性において見えてきているんじゃないかと。

もともとぼくの仕事というのは、自分から発するものではなくて、他者から発するような部分があったので、プランニング自体はすんなりと受け入れることはできたんですが、実際にやってみると、なかなかこれが。贈りものをするというプラン自体が、話の中で、さっき言葉の遊びだというようなことをおっしゃっていましたが、その遊びのレベルでは概念的に理解できたのですけれども、いざ物が来て、それに返すという、実際に物から自分が感じ、そこで何らかの動機を読み取って返すということは、なかなかこれが遊びにならなかったんですね。これは言い逃れ（笑）、言いわけを言っているのですが。

それで、自己というものをそれに当てはめて考えてみた場合、子供を見ていると非常にわかりやすいと思うんですが、自分を発見していくプロセスというのが明快にありますよね。この世に生まれてきて、自分の体が、両手両足があって、顔があってということを見つけていく、物理的にでもですよ。鏡を見て、俺は俺だと思ふ瞬間が必ずあるわけですよ。そこから自己というものが何らかの形で反映されていくと思うんですけども、そういう意味で自己が成り立ってきて形成されていくということと逆行するプロセス、つまり自己をどんどん解体していきながら、最小限の自己を求めていくようなプロセスというのが、多分今ここでやろうとしていたことなのかなと思うんですね。でも、その最小限の自己を求めようとするプロセスというのは、全く反対に最大の自己を考えていかなとなかなか見つけにくいものであって、自分の中にあるさまざまなレイヤーをどんどんどんどん捨てていって残るもの、または逆にどんどん自分プラスしていって、自分はもっとできる、もっと可能性がある、できるんだという中で最大の自己というのを見つけていく。要するに子供の話につながっていくと、人間として自分が自分だとわかる以前の状態になかなか戻りにくいんだと。そういうことを考えて、ずっと悶々としていたんですね（笑）、スズメバチの巣を見ながら。

司会 最初に今村さんが中村さんに贈ったのは、スズメバチの巣だったんですね。

中村 そうなんです。それをコンピューターの前に置いて、神棚のように毎日拝んでいたんですけど。でも、やはり絶えず返ってくるものは、その物から来るものではなくて、その物を通してやりとりしようとしている、そのやりとりの中で考えていく自己ということであり、今言ったような自分を解体するのか、プラスしていくのかということ振幅するわけですよ。結局コミュニケーションとしては、今村さんを氷見の旅館の「永芳閣」へ招待する。とりあえず来てみて話しましょうよという段階が、もう半年以上たっていたんですね（笑）。ギャラリーでも永芳閣のビデオを見せていますが、あれは本当は3時間ぐらい延々話していて、そのうちの1時間ちょっとしか入っていないのですけれども、後半の方で、プリの話が、要するに生身のものがとてもおもしろいという話になって。つまりこの展覧会は工芸的な側面、物質的な側面を非常に大事にしている、そこに動的なものが入っていく、すると一体どうなるのだろうという今村さんの興味と、ぼくの永芳閣のプロジェクト、つまり旅館を再生するプロジェクトなんですけれど、それが非常に一致した点があったんですね。

それで、できれば生のプリをオープニングに資生堂ギャラリーに

送りたいと。そこでプリ自体を料理し、残った残骸を今村さんが、骨か何かを作品にしていこうということもありましたね。結局それは資生堂側とのやりとりの中で、つじつまが合いにくいということと、生ものはやはりだめだということでポシャっちゃったんですけども。

ただ、そのことがあって、実は、日にちとしては延びてしまったのですが、あした、プリのショーを、うちで、今村さんを招待してやるのですが、そういういきさつなんです。

結論から言って、果たしてコラボレーションをぼくと今村さんがやったのかというと、やはり最初の段階で、ぼくがそれを物として解決できなかったということがずっと尾を引いてしまって、ただ、でも、そのかわり、今言ったような意味においては非常に自己に対しての考えを深める時間は持たたと思うんですけどもね。ただ、単純に礼を尽くすという意味での礼がなっていなかったというような部分は反省いたします（笑）。

今村 今話されているように、私はもともと、中村さんと何か1個のものをつくるということは、多分不可能やなという感じはあったんで、だから、むしろ今話されているような、例えば考えあぐねているというふうな話を次々、とりとめもなく、往復書簡のように「今こう考えているけれど全然思いつかへん」で返ってきててもオーケーかなと、何か話が行き来したらおもしろいんじゃないかなと思っていたんですね。

それが、今、結果的に聞くと、割とグッと深く考えるタイプの人やから、その背景がどうであってという全部の構造なり組み立てをずっと読んでからさあ自分は、となさるタイプだから、結果的には何か返しにくかったかなと思っているんですけど。でも、何かもう少し、ほんまに永芳閣へ行って会話をしているような、こう言ったらこう返ってくるみたいなの、たまたまこう考えているところの横に子供のおもちゃがあったから、これを贈りましたというふうな、関係ないけれども、そのようなことでもありやっつたやないかな。

ただ、私も意地悪なつもりはないんですけど、一番最初に話をしたときに、例えば私にハチの巣を贈るのではふだん作品の中にそういうものを平気で使っているからおもしろいやらな、何かひねりをきかせなきゃ、というような話でちょっと盛り上がったこともあったので、私も何を贈ろうかなと思ったときに、中村さんというのは常に、例えばマクドナルドにしろ、企業を相手にして探れば探るほどその構造が見えてくるような仕事をされているので、だから逆に、ハチの巣なんかの得体の知れない、どうやってこんなんができたかというふうに思いながらも構造としてはめちゃくちゃおもしろいものをポンと投げかけたらどうするかな、という興味がすごくあったんです。どう返ってくるか、すごく楽しみやなと思って最初に投げかけたんですけど、それが逆に次の返しがつらいものになったのか、それがいかんかったかなというふうな反省もしているんです（笑）。

中村 ある一定の時間を過ぎると、もう答えを、何か返事をしにくくなっちゃうんですね。限界を超えてしまっていたんですね。でも、それはなかなか難しいですね。

金沢 中村さんの仕事って、企業といろいろやったりしているけど、コミュニケーションの問題って大きいよね。ぼくはちょっと今回の作品で文句を言いたいのは（笑）、中村さんは今村さんとのコミュニケーションを拒否したって感じてしまったんだよね。その象徴として、あの永芳閣のかい壁ができています。あの壁は非常にそういうものとして感じてしまったんですよ。

それで、今村さんのハチの巣にしろ、昔、小さいころつくったカバにしても、そこに手紙がついているよね。あれって、読むと非常に泣けるんだよね。あれをなぜ今村さんが贈ったかという理由が

すぐあるわけ。単なる物じゃないんだよね。もうそれは、物を超えたものなわけ。それに対して、なぜ返答できなかったのかというのは、ぼくは、中村さんのふだんの仕事を考えると非常に不思議なわけ。なぜあそこで壁をつくったのかという。

中村 壁というのは物理的な問題であって……。

金沢 でも、そうだけど、あれはやっぱり、ぼくの見方かもしれないけれども、中村政人だぞという壁に見えちゃうんだよね。

中村 うーん、まあそれはしようがないでしょうね。ただ、今言っているコミュニケーションの問題というのは、道徳的な価値観を持ち、社会性を帯びた行為としてのコミュニケーションという意味であって、それは多分ぼくは求めていなかったわけですね。そうではなくて、作家としてのコミュニケーションの仕方があるからこそ、今村さんの泣ける手紙にぼくも泣けるように答えるわけにはいかないわけですよ。いわゆる自我であるとか、先ほど金沢さんが言っていた中では、自負するものと言っていますよね、自負するときの自ということは何かということなんですよ。やっぱりそれは譲れない部分があるわけですよ。その譲れないものを考えるが余り、これまた言いわけになるんだけど（笑）、考えるが余り、その部分が、うーん、どうなんだろうねというまですよね。ですから、感情的なものを出したりとか、情緒的なものを言葉にする必要は、ぼくはなかったと思うんです、手紙の中では。

ただ、コミュニケーションというのは、やはり1対1だけではないわけなので、今回の場合には、ぼくと今村さんの話には樋口さんが入ってくるけど、今村さんと金沢さんの間にぼくは入れないわけです。それはお互いにみんなそうなわけであって、他者の介入といっても、1対1の関係で、1対2や3にはならなかったわけです。

それで、もうワンステップもしあるならば、それは多分、この前、「nIALL」でやろうとしていたことなのだけれども、もうワンステップあるならば、例えば金沢さんと今村さんの間にぼくがチャチャを入れたりということも、プロセスとしては可能なわけですよ。そうしたいかどうかは別として。ただ、多分それがあれば、今言った、あそこに大きな壁をつくるのは樋口さんとぼくで決めてしまったような部分があるので、展覧会全体の印象の中で樋口さんのバランスがあったと思うんですけれども、そういう意味でのコミュニケーションというのをもっと促すことはできたと思うんです。

金沢 壁の物理的なことを言っているんじゃないですよ。あれはコミュニケーションを拒否した、その象徴みたいなものとして……。

中村 その、拒否っていうのはどういうことなんですかね。

金沢 なぜあれに答えられなかったのかな、と。その理由がわからないんですよ。それを聞きたいんですよ。

中村 答えがないんですよ。答えられなかったんじゃないかと。答えようとは努力したが、そういう意味での、物理的な意味での物のやりとりはできなかったということですよ。だから、招待したということなんですけれども。その招待したということ自体は、1つのコミュニケーションだとは思いますが。ただ、どう見ても違和感がありますね（笑）。

金沢 このプロジェクトは、もしかしてすごくおもしろいものになっていたかな、と思ったんです。さっきぼくは、今村さんとぼくの、京都と埼玉の距離ということを行いましたよね。でも、往復書簡とかそういうことになると、それが解消されてしまう。離れていれば離れているほど、逆におもしろかったりとか、ものすごくいいコラボレーションになる可能性があったのを、あそこでなくしたことが残念だなと感じました。

今村 例えばさっきのふたりの関係の話やけど、それを探っていったら、展覧会全体の関係も見えてくるし、樋口さんとの、これを

企画する側との関係も見えてくる。確かにすべて関係してくるし、なぜ今このふたりがこうやって話をせなあかんかといったら、やはり展覧会があるからやしとか、こういう今までの4年の経過があるからこうなっているとか、どんどん芋づる式に全部つながってくるわけで、やはりその辺で、ここはここというふうに切っていくと、物事が動けへんことってあると思うんですね。だから、ちょっと気になったんは、ふたりで話しながら、企画する側の樋口さんも関係してくるしというふうになると、もうどんどん動きがストップするようところがあって、もう少し何かやりとりの中で、手紙なら全く1対1の関係で、その中で別に全然関係ないことを言い合っていてもいいんじゃないかというふうな、そんな思いがあったので……。

中村 確かにね。でも例えば主体的に好きな人に手紙を書くとか、そういうときというのは、書きたいから書くわけですよ。でも、書きたいから書くというその主体性が、今回の場合は動機としてはなかったわけですよ。ないにもかかわらず、方法としての、ルールだけを共有しようとしていたので、今おっしゃっていることはわかるんだけど、贈りたいものを贈ろうとしたとき、その贈ろうというものの構造を気にしてしまうわけですよ。そこでとまってしまったんですよ。

金沢 それをやったり、視覚的なものに見せていくのが美術家としての役割だと思うわけ。

中村 まあね（笑）。でも、それを構造として視覚化するというテーマじゃなかったわけ。

金沢 でも、最終的にあいうギャラリーというところで作品を展示するという、そういう形になってくるわけですよ。

中村 まあ、並んではいますけれどもね。

金沢 並んでるけどさ（笑）。余り中村さんのことばかり言っても、こんなところで文句を言うのは悪いけど。

中村 最初のプランでは確かにあったんですよ、そういう意味では。ある種、構造を視覚化するというような平面の仕事とかを考えてプランニングしているものがあるので、それをチャレンジしようかなあと思っていたんですけど、次回に。

司会 今、ほかのチームがどういうことをやったのか初めて聞いた部分もあると思うんですけど、その中で、ほかの人の仕事を見て、聞いてみたいこととか、言いたいこととか、ないですか。

中村 発注ということで、通常は発注というのは、見積もりをとって、幾らですかというプロセスに入ると思うんですけど、そういうプロセスというのはあったんですか。

須田 そんなに見積もりとかは……

今村 まあ全然なかったですよ。

中村 須田君に発注できるという事実がここで生まれたわけじゃない。それは幾らでできるのかというのをぼくは知りたいな（笑）。

須田 ものによりますけど。何か具体的にありますか。

中村 例えばこのぐらゐの樁を発注したいなとか。やっぱり欲しい人がいるわけだから。

須田 でも、発注ということについては、ぼくは基本的に作品は売るものだと思っているし、それで生活するのがアーティストという形だと思っているんですよ。資生堂としては、あの値段を言ってもいいんですかね。なかなかこういうものって表に出てこないんですけど。

中村 まずいんじゃない？

須田 えっ、まずいんですか（笑）。

中村 そうしたら、何で俺のはこんなに安いんだと（笑）。あいつと俺は。

司会 いいですよ。それはぼくが決めているというよりも、市場が決めている値段だから。

須田 資生堂ではないにしても、例えば雑草1個、これぐらいのものが大体今は市場価格としては8万から10万円ですね。樁じゃなくて、これぐらいのバラだったら、大体今200万から250万ぐらいです。当然ギャラリーが入ってくるので、ギャラリーが50%を取って、僕のところには50%が入ってくると。だから、雑草1本だと4~5万入るといふ(笑)。

中村 今回の場合は、例えば木彫り職人というような職人的な意味合いもちょっとはあったわけじゃないですか。

須田 そうですね。

中村 自分のつくりたいものをつくらせないで羊歯をつくれというようなことがあるわけだから、そうなるとコミッションワークとかいうよりは、いわゆる業者に発注するという感覚に近いものがちょっと入っているわけですよ。

須田 そうですね。

中村 そういった場合というのは、須田君はどうなんですか。それでも受けるんですか。クマを彫ってくれとか(笑)。

須田 結構なりゆきというか、経過次第だと思いますよ。それこそみんなとの関係は、気がついたらもう4年一緒にいろいろ、あでもないこうでもないという話をしている、ぼくも今村さんを見ているし、今村さんもぼくを見ているわけだから、そういうなかでさすがにクマを彫ってくれというふうに来たら、ちょっと考えたかもしれないですけど(笑)、まあそういうことはねえだろうなというのがあって。最初はキノコかなとか思っていたんですけどね。そうしたら、羊歯というのがきて。これは結構、「キノコだと思っていたのにー」みたいなところがあったんですけど(笑)。

今村 須田さんの意識としては、例えばギャラリーでやるにしろ、コミッションワークにしろ、この場にこれぐらいの種類のこんなものをとか、その辺の関連を持ちながらいつも考えるでしょう。

須田 そうですね。

今村 それも含めて、須田さんの仕事が、職人じゃなくて美術のフィールドに属するところやと思うんですけど、今回の場合はそういうところを抜きにただただ言われるものをつくるという、その辺の意識の違いというのはありましたか。

須田 多分この企画がなければ、やらないというか……。この先、例えばだれかとそういうコラボレーションをやりたいという話も持ちかけられたとしても、やるかどうかはちょっとわからないですね。今までやったことがないですし、この先もやる予定も、余りやる気もないというのがあって。今村さんと1回コラボレーションをやったから、じゃあ次も今村さんとコラボレーション作品を出すということはもう多分ないと思いますし、あるいはそのほかの3人とコラボレーションをしたいかと言われたら、余りしたくないというのが正直なところですね(笑)。

今村 今回も大まかに羊歯と言ったんですけど、自分の作品がだんだんできてくるでしょう。そうしたら、ああ、やっぱりこれは大きさは20センチで、こんな感じにとか、もうちょっと曲がってとか、もうちょっと注文しようかなと思ったんですけど、その辺がちょっと、プライドを傷つけるというか(笑)、ほんまに職人に徹しろと言っているような感覚で、いやあ言わんどうかなと。その辺はちょっと迷ったところで、自分のものがどンドンできてくると、何かやっぱり必然的にこれぐらいのものが欲しいなとか、もうちょっとグッと曲がっていてほしいなとか、いろいろ思いがでてきて、もしそこまで言っていたら、ちょっと嫌な感じだったでしょうね、きっと。

須田 どうですかね。結構今回は、職人的な立場に徹してというふうな言い方をさっき中村さんもしてましたけれど、ただ、あそこのスペースはもう3回もやっているからよくわかっているし、自分の方も今村さんにこういう机を見つけてくれと言っているし、最初はだから、今村さんに羊歯と言われて羊歯をつくって、これをどうするのかな、回るのかなとかも思ったんです(笑)。回らなくて、ああいう形で出てきたので、あれは本当に、設置の日に初めて見たんですよ、ああいう形になったというのは。その辺は何か玉手箱的な感じで、単純に楽しかったんですけど。

それで、場所も、最初はもうちょっとこっちにしようか、あっちにしようかみたいなことを言っていたのですが、結局あそこに落ち着いて。確かにそれをやっているときに後ろを見たら、何かでっかい壁が立っていて(笑)、「これは何?」というような話はしていたんですけどね。でも、結構この展示会は、何だかんだいってまとまらないんじゃないかなというふうなことをずっとぼくは感じていて、来年で最後なんですけれど、それもきれいな形でみんな1つの方向を向いてきちり終わるといふことはないんじゃないかな。この後、最終回に向けての打ち合わせがあるんですけど、すごく不安なんです(笑)。そういう感じですね。よろしいでしょうか。

中村 続いて田中さんに同じ感じで聞きたいんですけど、漆というのはどちらかというと仕事を受注される場合も多いわけじゃないですか。その中で自分を見せていくということで、田中さんはいつも葛藤しているなというのがすごく、この何年も見ていてわかるんですけども。でも、美術と今言っている中では自分から発する。つまり商業主義的な意味でのデザインとか、いわゆる一般的な工芸的なものとは少しスタンスが違うような部分が、今村さんの投げかけによって少し露呈したような部分があると思うんですけども、そういう意味ではどうなんですか。

田中 いや、おもしろかったですよ。「漆をやっています」というと、やっぱりお椀を塗ったり、棗とかというふうになってしまうんだけど、ぼくは漆をやっている、人に頼まれて何かをつくるということを実はやらないんですよ。やらないというか、やりたくないというか。だから、そこからして既に、いわゆる一般的な漆芸家とは違うと思うんですよ。ただ漆を扱っているというだけであって。表現として漆に接しちゃっているから。それでもいろいろ頼まれたり、どうしても断れなくて修理とかやることもあるんですけども、労力としては実は大変で、それはもう手間もかかって、さっきコストの話がでたけれども、コストもそんなに取れないんですよ。なぜかという相場があるから。美術の値段って、さっきの須田さんの話を聞いて、ああ、なるほどと納得した人もいるだろうし、驚いた人もいるだろう。要するに値段があつてないようなものだから、そのときの人の価値観が決めていく。ところが、漆とかが相場がありますよね。そういう意味においても非常にしんどいと。すごく労力はあるけれども。

それで今はやらないんですけど、ただ、そうはいっても、あくまで自分を中心にものを考えていくということに、やっぱり疲れるときがありますよね。そういう点で今村さんが介入してくれたことによって、自分の発想ではないものがどンドン出てくるから、それは今回に限らず自然にそういう機会があれば、してもいいのかなとは思いました。そういう場があればですけどもね。どうしても自分が1人でつくる、表現するということが常に前提にあるから。そういう意味では、いい経験になったと思いますけれどもね。答えになっていますか。

今村 常に我々よりも自分の仕事をするということを強固に持っていないとできない世界ですね、そういう意味では。

田中 それは変わらないと思います。何てこの人たちは強固なんだ

ろうって（笑）、もう強烈だよなと思いつながら接していますからね。ぼくから言わせれば、もうこの4人の方が強烈で強固ですけどね。今村 大体この展覧会で一番風当たりが強いのは田中さんでしょう（笑）、周りからの。

田中 そうですか。ぼくは中村さんかと思っていたんですけども。

今村 いや、周りの、見ている人という意味ですよ。

田中 ぼくが比較的工芸に近い人間なので、工芸関係の人が見た場合の風当たりが強いのはぼくですよ。

金沢 田中さんは、自分のことを工芸家と名乗る？

田中 工芸家とは言わないですけど、漆芸家でもいいし、漆造形家でもいいし、今風の言い方でアーティストと言ってもいいかなとも思っています。去年かな、アメリカで個展をやったときにはアーティストと言いました。なぜかという、やっぱり誤解されちゃうんですよ。日本で考える工芸家のニュアンスというのは、日本的な工芸の発展があるから美術的な要素も含まれているし、表現としての工芸という領域もあるんだけど、欧米でクラフトとなっちゃうと、本当にフォークアートの方にいっちゃうんですよ。かなり概念が違うから、外国でやる場合には、例えばラッカーをつけるからラッカーアーティストとか、アーティストとつけた方が自然ですね。ただ、日本では、今はもう別に何でもいいです。人が漆芸家と言えば漆芸家でいいかなと思ってるし、別にその辺はこだわっていませんね、もう。金沢 ぼくも工芸の鍛金科というところを出ていて、それで、今、一応彫刻家という名前前で活動しているわけですけども、いわゆる工芸という、用というか、機能というか、すごく古い考えかもしれないけれど、工芸というものからそれを取り払ったときに、素材と技術、そこから形が出てくるということを考えると、彫刻の世界と何も変わらないという考えがぼくにはあるわけ。田中さんは……。

田中 確かに一般的な意味の工芸は……、こんな話していいんですか？ 工芸のイメージはやはり器であり、そういう生活の中の道具というふうなイメージがあると思うんです。でもぼくは、ある意味で仏像も工芸に含めているんですよ。時代によって違いますけれども、例えば天平時代などの乾漆像でも、明らかに今でいう彫刻という概念では絶対ないと思ってるんですよ。そういうふうにとらえるのならば、建築でいろいろな工芸技術を含んで空間をつくっていくのも、ある意味では工芸空間ととらえちゃうこともできてると思ってるんです。要するにぼくが言いたいことは、工芸という言葉のとらえ方が違うということなんです。一般論的な工芸にすり合わせるのだったら、ぼくは工芸家は使わないんですよ。使えないんです、金沢さんと同じように。

あと、もう一つ、ぼくが求めているのは彫刻的な要素が強いんですけども、じゃあ今の彫刻のありようを全く同じように求めているかという、そうじゃないんですよ。漆の形を追求していったときに、単純に形態だけで考えていけば、それは彫刻的な発想になるかもしれない。けども、もののありようとか、存在のありようというのが、ぼくの中では何かニュアンスが違うんですよ。だから、やはりそこも言い切れないところがあるんです、彫刻とは。そうすると、何なのかと……。

中村 それでちょっと思うのは、この前も学校で話していたんですけど、明治期に西洋から美術という概念が入ってきた段階で、それまで木彫をやっていた人が教育的にいきなり塑像を始める、粘土をつけだす。でも、絵画の概念は油絵科と日本画科という2つに分かれたわけだけども、立体は2つに分かれなかったんですよ。だから、芸大の美術的なことを見ると、結局は権力争いで、先生たちのバランスの中で勝ち残ったのが今のバランスをとっている

わけで、例えば張りぼてをやっている職人の人たちも当時いっぱいいたわけだけども、それは全く美術という概念から排除されていってしまった。

そういうふうになると、彫刻という概念だけが何か特別な感じがするんですよ、ぼくも。例えばぼくがやっていることだって、社会彫刻だとか言い切れば言い切れるわけですよ。そのときに彫刻という概念は当てはめやすい。でも、油画とか日本画とかいうと、ちょっと違いますよね、非常にすみ分けが見えてしまっていて。そういう意味では彫刻というのは、言いやすい概念だけれども、自分が彫刻家だとは言えない。

金沢 そういう歴史とか制度とかいうものもあるんだけど、例えば本当の工芸職人が漆を扱うのと、田中さんの漆の扱い方というのは、どこが違うんだろうって考えるんですよ。

中村 それは上手いか下手かということですか。

金沢 上手いか下手かじゃないですよ。上手いとか下手じゃないんだよね。はっきり言うと、田中さんとかぼくたちがやっているのは展覧会芸術というやつかな。ちょっと極端な話ね。ぼくたちが扱う金属なり、漆なりと、本当に純粋な職人の人が扱う漆とは、どんな違いがあるのかなというのが……、その辺が気になるころもあるんだけどね。

今村 美術というのは徹底的に自覚的なものやと思うんですよ。だから、例えば技術を見せたとしても、その技術というものが浮き彫りになってくるように持っていく。展覧会芸術と言われたら、まさに展覧会というのが、そういうホワイトキューブへ出すことによって大きな流れの中の外へ出されるというふうな感覚が出てくるので、要は外へ出されるということは、その特徴というのがあらわになってくるような。

田中 ちょっといいですか。今の金沢さんの質問で、言われていることはわかるんだけど、展覧会芸術というのを、例えば漆の技術的なことを言われているのか、例えばこういうギャラリーとかこういうところで展示して見せることを言っているのか、どちらなんですか。

金沢 どっちでもないというか（笑）。

田中 そこをもうちょっと具体的に聞かせていただけませんか。

金沢 いわゆる造形作品として展覧会に出すということ、行為。

田中 ものの雰囲気、ありようというか？

金沢 うーん……。さっき彫刻家とか、造形家ということをやたら言うのは、ちょっとためらうところがあると言っていたじゃないですか。

田中 ためらうのではなくて、違うということですけどね。

金沢 そこは一体どの辺なのかという気がしたの。

田中 展覧会芸術という言い方よりも、こう言いかえればいいんだと思うんですが、ぼくもギャラリーとか美術館で発表しているということは、間違いなく欧米のスタイルに乗っかっているということなんですよ。ただ、ぼくは欧米風のこういうスタイルに乗って、そこで漆の魅力をアピールすることがある意味では現代の漆のあり方の一つだろうと思って、自覚的にやっているんですけども。それも漆の魅力をアピールする一つの有効な手段だろうと。

一見欧米風のこういうギャラリーでやることも、一見日本の伝統的なものに乗ってデパートでやることも、本質的にはやはり展覧会のためにつくっているんだろうなというのが、漆芸家でも現実ですよ。例えば伝統工芸の作家がちゃんと生活の場を考えてやっているかという、やっぱり展覧会芸術だと思うんですね。結局それは形式というか表現の場が違うだけであって。本当に使えること、例えば器的に考えている漆の職人さんと呼ばれる人は、やはりそういう別のルートで作品を見せていると思います。普通の生活空間を

前提につくって、あくまで展覧会目的ではないですよ。

ただ、もう一つ、最近ちょっと思うのは、例えばこういうギャラリーで、こういうホワイトキューブで見せるときに、漆というのは難しいなと思うようになってきたんです。例えば身近な生活空間とか、畳の上とか、そういう中で触れる方がやはり自然に感じられるよとか、床にボンと漆を置きちゃうのって、本当にそれが生きているかなとか、要するに難しいなということを感じています。



それとあともう一つは、逆に、去年の経験がもとになって、単純に展覧会のために造形物をつくるということだけではなくて、より日常生活空間とか建築空間の中に漆を生かす何か方向も興味が出てきました。

司会 このメンバーは、こういう話をしだすと大体夜中まで続くので、一たんここで切りましょう。予定した時間はあと10分ほどなので、会場から何かご質問があれば、どなたか。

会場 一ついいですか。さっき金沢さんと今村さんのお話の中で、失敗のことがちょっと出ていましたね。それで、最低でもここまではやらなければいけないとかいう話が出ていましたけれど、失敗と失敗じゃないことの違い、これを教えてもらいたいです。気になったので。

今村 正確に線分けはできないと思うんですが、やはり自分が納得いくところへいくという価値観みたいなものがまずありますよね。だけれど一緒にやった場合は、なかなかお互いが完全に納得いくところへいきにくいと思うんですね。そのときに、ある意味では失敗なのだけれども、結果的にはお互いが違うこととか、まとまりきらないけれども、そのまとまりきらないお互いの幅みたいなものが見えるということになってもいいというのが、自分は失敗でもいいという感覚で、もしそれがもう少しお互いに観点も一致して、ふたりがそろってスーッとある方向を向いて1つのものができたら、それが一応完成というか、そういうふうに分かち合っている中で区別して。だから、最初は失敗でもいいというのは、お互いの違いみたいなものが見えるだけでも、結果としてある程度はおもしろいものになるんじゃないかというふうに思っていたんです。

会場 それは感じ方の問題ですね。そうでもないですか。

金沢 そうだと思います。全く個人的な感じ方と言ってしまったら、もうそれで終わっちゃうんですけど、まさにそうだと思うんです。

やっぱり作品というのは、何かから何まで自分でわかっているものじゃないですよ。何かいろいろな価値観を持ちちゃって、自分でおもしろくないと思っているものが人に見せたら非常におもしろかったという場合もある。ぼくがここで失敗と言ったのは、自分の価値観にそぐわなかったということです。それでいいですか(笑)、もしかしたら、ぼくがいいと思っているかもしれないけれども、あなたはこれは失敗だったと思うかもしれないですよ、作品を見て。

会場 何というんですか、ネゴシエーションの問題だと思うんですね、コラボレーションというのは。共創的というのは、本当はあり得ないような気がするんですよ。どっちかがどっちかを取り込むような形で、お互いに違うのだから、完全に同じもの、あなたもいいけど私もいいというような感じのものというのは努力してもなかなかできなくて、今言われた失敗が本当は成功なんじゃないかなというような、そんな気がしないでもないのですけれどもね。そういうところをさらけ出して見せた方がいいような気がするんですよ。

金沢 ただ、そういう考えでいくと、何かいつも自分の価値観に合わないものは拒否していくような……。

会場 いや、ぶつかり合いでいいと思うんです。

金沢 そのぶつかり合いの中で、ぼくが一番初めに言ったけど、何か新たな自分が発見できる喜びというかな、そういうものが生まれる可能性がありますね。

会場 そうですね。ぶつかった方が、かえてそういうものがあらわれるような気がするんです。先ほどの永芳閣の話じゃないですけど、何かそんな気がちょっとしたんです。

金沢 だから、それを期待したいんですよ。美術の場合、やはり物と物というかな、物ではない人もいるけど、なかなかコラボレーションしにくい部分が、視覚的に目に見えるものでやらなければいけないという点で非常に難しい部分があるかもしれないけれど。例えば音楽とかだと、もっとその瞬間瞬間に判断して即興的に何かやっていくとか、そういうことを考えると、もっと美術でもそれが可能になってくる部分もあるかなという気がしていますけど。

会場 どうもありがとうございました。

中村 永芳閣の話も出たんですけど、やっぱりぼくにとって成功は、永芳閣の事業が、ちゃんと利益が上がり、ボーナスが払えるようになるというのがあるわけです。このプロジェクトを始める前までは、いわゆる美術的な思考の中では、どうしても個人の主観的な価値観だけで成功と失敗というのを何らか決めていく。例えば完成と未完成というのもそうですよね、ここで完成したということは自分の主観で決めていく。でも、今の仕事を始めてからは、自分が主体的であるというモチベーションだけがまず最小限で、その他の動機というのは、何でもありなわけです。今まで絶対にやってこなかったことでさえ、やらざるを得なくなってくる。でも、最初の動機だけ主体的であれば、迷わないんですよ。そういう意味では、失敗はあり得ないんです、ぼくの中で。

ただ、第三者との関係、今ここでのコラボレーションではなくて、ほかの会社との契約関係とかになってくる場合、失敗というのは確実にあるんですよ。それは経営が破綻するとか、という意味で。

いままでの美術という概念の中では、なかなかその範囲まで美術とは言えないわけですよ。ぼくもこれで、自分でコンサルティングをやっていることが美術だと言い切れるかという、なかなか言い切りにくい。なぜならば自分のありよう、つまりここで問題になっている「私性」というものが、なかなかそこでは発揮されにくいわけですが、そこが非常に難しいですよ。

今村 例えば永芳閣のプロジェクトが、今、放っておけば破綻しているんだけど、5年延命させた。だけど、やっぱり破綻した。でも、いろいろなイベントがあり、そこは盛り上がりながら地元も少しは変わってきたという、そういう結果となったとしても、それは成功なんですよ、中村さんの中で。

中村 このプロジェクトに対して、絶えず主体的にありたいという意識が消えないんだよね。だから、ぼくは歌なんか歌ったことはないんだけど、もしかしたら歌うかもしれない(笑)、そういうモチベーション

を与えてくれるならね。そういう意味での可能性はすごく感じるわけ。多分そこに向かっていくことがアートとしてのおもしろさであって、その動機が、素材で区分けられるとか、物理的な物で区分けられる、事で区分けられるとかいうことを越えて考えれば、多分もう少し本当は楽になれるはずなんだけど、なかなか楽になれないのはなぜだろうね（笑）。この後のミーティングが楽しみだな。

司会 この反論はやめましょう（笑）。

では、本日はこれで終了したいと思います。ありがとうございました。（拍手）

（作品写真撮影／桜井ただひさ）